

The 58th Annual Meeting of Physiological Society of Chubu Japan

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/30248

『学会見聞記』

第58回中部日本生理学会に参加して

The 58th Annual Meeting of Physiological Society of Chubu Japan

鈴木 崇 文

金沢大学大学院医学系研究科脳医科学専攻
脳情報分子学 修士課程1年

2011年11月1～2日にかけて福井県の県民ホール（福井市地域交流プラザAOSSA）で開催された第58回中部日本生理学会（日本生理学会の地方会）に参加しました。中部日本生理学会は初めての学会発表でしたが、非常に有意義に過ごすことができました。私は工学系出身であり、日本視覚学会、日本バーチャルリアリティ学会を見学したことがあるのですが、学会によって様々な特色があることに気付きました。脳を扱っている分野でも工学系と生物系の学会ではアプローチ方法が異なることなどが挙げられます。多くの分野で学問的な隔たりがなくなってきたのは事実ですが、まだまだ多くの交流が必要だなと感じました。中部日本生理学会は日本生理学会の地方会ということもあり、小規模の学会ながら深い議論が行われており、長時間の活発な議論が印象に残る学会でした。

プログラムの内容としては、イオンチャネル・ニューロン・シナプス、循環生理、行動・生体リズム、顔認知・記憶、理論といった基礎分野から脳科学の応用まで多岐に渡りました。実験動物としてはゼブラフィッシュ、マウス・ラット、サルなどのいわゆるモデル動物が主でした。一般演題（オーラルとポスター）の中から私が興味を持った発表をいくつか紹介します。清水由布子氏「ADHDモデルラットにおける豊かな環境飼育：発育期のSHRの多動性と衝動性の減少」：発達期の外部環境の変化がADHD症状（多動性および衝動性）の発現に影響を与え、この機構にはPFCにおけるCARTの発現変化が関与していることが示唆されました。玉利健悟氏「抗IL-6受容体抗体を用いた外傷性嗅覚障害マウスの嗅神経再生」：外傷後急性期の抗IL-6抗体投与は嗅神経切断後の嗅神経再生促進に有効であり、外傷性嗅覚障害の予後成績向上に貢献する可能性があると考えられます。田村了以氏「サル海馬における短期シナプス可塑性」：膜貫通内側部の刺激による歯状回の対パルス反応は、霊長類とげっ歯類とで類似しているが、集合スパイクへの対パルス抑圧効果が霊長類でより長く持続し、ジアゼパムに対する感受性も異なっていることが明らかとなりました。多数あるオーラル発表の中でも非常に興味が惹かれたのが富山大学医学薬学研究部統合神経科学講座、中田龍三郎氏の「ヒトとニホンザルによる顔の視覚探索課題」というオーラルの発表です。プレゼンテーションの仕方が非常に良かったことと、自分も過去、顔認知について研究したことがあったからです。特に視覚系の研究をしていると百聞は一見に如かずの意味を深く考えさせられることがあります。発表が視覚的に分かりやすいことは

一般の人もしくは他分野の研究者にも理解が容易であることを物語っているからです。そういった知見は今後の学会発表を含め人生全般で応用できるのではないかと考えています。内容は顔の視覚探索課題においてポップアウトが生じる顔画像をヒトとサルで比較し、顔処理のメカニズムの差異について検討していました。ポップアウトとは、探したい対象が多数の妨害刺激の中にあっても瞬間的に探している対象を認知できる現象です。目と口といった顔部位の位置情報(-)(*)は顔であるのか判断する際手がかりとなるが、ポップアウトでは顔の輪郭部分の情報が手がかりになることが示唆されたそうです。また、サルについても同様な傾向を示すことが言われていました。今後の研究成果も楽しみに発表でした。

本学会は天候にも恵まれ、会場からは福井市を一望することができました。多くの急峻な山々を眺めていると中部地方の繋がりについて思いを馳せることができます。私は日本海側の石川県、内陸部の長野県、太平洋側の静岡県に長期間住んでいたことがあるので中部地方の気候の違い（日本海側、内陸部、太平洋側）を嫌と言うほど味わいました。しかし、どこの地域も自然の多い豊かな文化を育んだ土地であり、日本の中央を分断する山脈で繋がっているのだと実感しました。金沢に来てから5年が経つと初めて雪が積もるのを見て興奮したことが嘘のようです。今は雪が降ると憂鬱な気持ちになります。これは脳が雪の中の生活を経験して導き出した答えなのでしょう。

実際に発表することは初めての学会でした。反省することは多々ありましたが、異なった知見を得ることができたことを今後の研究で参考にできればと思っています。

